長州藩と会津藩

小山良昌

まえがき

長州と会津の関係について、巷間では「会津の長州に対する遺恨」などの語で表現され、正義の会津・悪の長州と一般的に認識されている。従って、山口県人の多くもそのように認識しており、現に安倍首相も二〇〇七年四月、遊説で会津若松市を訪問した際、「先輩がご迷惑をおかけしたことをお詫びしなければいけない」と謝罪している。

私もそのように認識していたが、二〇一三年にNHK大河ドラマ「八重の桜」が放映されることを耳にし、再び「悪の長州藩」が放映され、全国で認識されるのかと暗澹たる思いに駆られ、実態を検証してみようと思い立ち、資料調査を始めた。

一　長州藩と会津藩

長州藩は三六万石余の外様大名。毛利家の遠祖は、平安初期の平城天皇の第一皇子阿保親王で、その末裔の大江広元は、源頼朝が鎌倉幕府を開いた際に招聘され、初代別当を務め、指南役として活躍した。

中興の祖元就は、所有した石見銀山を朝廷へ献上するなど勤王の志厚く、その結果、朝廷は毛利家に菊御紋の使用を許可した。江戸時代には、三〇〇諸侯中唯一の皇族系大名として幕府公認のうえ朝廷へ献銀を続けた。この毛利家の勤王行動は、家臣の思想や行動に反映し且つ誇りとされ、吉田松陰をはじめ多くの藩民が勤王の志士、皇室の藩屏として活躍した。

一方の会津藩は東北唯一の親藩大名で、石高は二三万石。会津葵紋を使用して東北地方の目付大名として君臨した。初代藩主保科正之は二代将軍秀忠のご落胤とされ、三代家光時代には幕府の要人として活躍した。正之は「会津家訓十五箇条」の第一条で「大君の儀、一心大切に忠勤を励み・・・」と書き、将軍家への忠節を家訓とした。幕末の藩主容保が新政府へ対抗して戊辰戦争を起した裏には、この家訓を遵守したとも云われる。

二　長州藩兵

江戸時代には武士の魂は刀との観念が強く、鉄砲は足軽の使用とされた。しかし、幕末期の長州藩はいち早く鉄砲の長所に

着目し、足軽のみならず藩士へも鉄砲の訓練を促し、且つ皇室の藩屏として軍備の強化を図り、奇兵隊など農工商民による諸隊を多数誕生させた。その諸隊に対する規律は特に厳しく定め、例えば、奇兵隊の「諭示」では、「農事の妨や農家への立寄り、果物鶏犬の盗みを禁じ、言葉使いも丁寧にし、強者を恐れず、弱者を恐れることは武道の本意」と教示し、規則正しく、上意下達の諸隊規律を確立した。慶応元年（一八六五）に結成した徳山藩山崎隊の「山崎隊人名録」によると、隊員二〇〇名中、隊規則に違反して処分された隊員は実に三一名に及ぶ。その処分内容は、剃髪追放、片鬢片眉剃り三十杖、投獄、野島遠流、斬首、切腹など厳しいものであった。その結果、戦場にても長州兵に対する地元住民の評判は良好であった。例えば新政府軍の従軍外科医として北陸道から会津攻めに参加した英国公使館付医ウイリアムは、諜報員もかねており、その公使宛の報告書に「この戦闘において、長州兵はもっとも訓練の行き届いた一番強固な軍勢であると、誰もが賞賛を惜しまない」と記し、また「長州の患者の一人が処刑され晒し首となった。原因は町の住民から暴力的に金銭を巻き上げようとしたためである。首は長州人が宿泊している寺の近くに晒され、ぞっとするような光景をかもし出していた」（中須賀哲朗訳『英国公使館員の維新戦争見聞記』）と記し、長州藩兵の規律に厳しい状況を報告している。

また、激戦地白河大沼村の辺見フサは、当時の思い出を次のように語っている。「私が十六歳の時だ。祖父の家は村一番の金持であったので会津兵に焼かれた。小判を甕に入れて前畑に埋めて逃げたが、会津藩兵に連出され、金を出せと脅かされて遂に埋めた金を出した。出さぬと殺されるから出したのである。会津藩兵が引くと官軍はトコトンヤレ節で入って来た。「どうしたひどい目にあったな」とやさしい言葉であった。村では握飯を出して御馳走した。村中の薪は皆会津藩に焚かれてしまった」（佐久間律堂著『戊辰白河口戦争記』一九三一年）。

三　会津藩兵

会津藩士はある意味で最も士魂を堅持していた。明治元年（一八六八）一月の鳥羽伏見戦では、刀槍隊を主体とした会津兵は、鉄砲隊の長州兵と戦って大敗した。鉄砲の優位性を認識した会津藩は、急遽蘭国商人スネルからライフル小銃七八〇挺を購入して新政府軍との抗戦に備えた。

長州・会津両藩が最初に対戦したのは、元治元年（一八六四）七月の禁門の変の時、毛利家の執奏に当たる勸修寺家は京都御所に隣接し、当時の戦火の状況を生々しく記述している。「辰剋計長州屋敷出火、同時鷹司殿出火・・・予宅も火難ハ相のがれ候へ共、会津の賊兵多数押込、家財不残、土蔵迄も打破乱入、重器衣服等ニ至迄悉うばひ取、其上畳・立具迄も打破、家内目も当られぬ有様、言語ニ絶し大盗賊、動乱に紛れ土蔵を打破り金銀家財衣服不残盗取、其上打ころし抔悪行、悪ト云共在余、悉会津之賊兵の仕わざ也」（『勸修寺経理日記』解題〈日本史籍協会叢書51、一九七〇年〉）。

それでは、戊辰戦争時の会津藩兵の実態は如何であったか。会津に近接する福島県郡山市『市制施行八十周年合併記念号』（二〇〇四年発行）には、「郡山商人たちは、官軍を官軍さま、会津兵を会賊と呼び捨てにした。戊辰の八月七日に会津兵の大襲撃で街の中心部五〇〇戸、一七〇〇棟が焼け落ちた。戦火が北上するにしたがい、会津兵の放火や略奪による大きな被害を受けた」と記されている。

英国公使館付外科医ウイリアム報告では、「会津国に近づくにつれて、その家臣らの評判が悪くなっている。ミカドの軍勢に度重なる敗北をこうむった会津兵は、自らの国への退却中に統制のない無頼の集団となり、逃走の道筋で物を盗み、人を殺し、略奪を働いた。この付近で会津に対する同情者は全くいない。若松では沢山の死体が堀から引き揚げられたが、彼らの両手は背中に後ろ手に縛られ、腹が深く切り裂かれていたのだ。会津の徒党のでたらめな残虐物語をいろいろ耳にした。会津兵が越後に退却していく途中、女たちを強姦し、家々に盗みに入り、反抗する者を皆殺しにしたのである」。

一方、降伏した藩主容保について、同報告は、「住民は皆確信を持って、会津藩主は仏国へ逃亡すると語り、切腹するはずだと断言する。ところが、会津城の大門が突然開き、藩主らが無抵抗な身なりで現れ降伏した。会津侯父子が江戸へ向かう道中では人々は冷淡な無関心さをよそおい、すぐそばの畠で働いている農夫たちでさえも、会津侯が国を出て行くところを振り返って見ようともしない。一般的な世評として、会津侯らが起こさずもがなの残忍な戦争を惹起した上、敗北の際に切腹しなかったため、尊敬を受けるべき資格はすべて喪失した」とする。

また、会津の農民については、「会津の国の貧しさは極端なもので、家並みは私が日本のどこで見たものよりもみすぼらしく、農民も身なりがわるく、小柄で、虚弱な種族であった。会津の国で高地民族の逞しい農民に会えると思っていたが、なかば飢餓状態のひよわな農民ばかりであった」とする。虐げられた農民は、藩主が降伏すると、十日後には会津藩領で大農民一揆を起こした。世上「ヤーヤー一揆」と呼ばれ、積年にわたる会津藩の圧政に対して農民が蜂起したもので、以後二か月間領内各地で打ちこわしが行われた。ウイリアムは「虐げられた農民の不満が爆発した」と断じた。

四　明治維新後の長州と会津

戊辰戦争の結果、会津・桑名藩らの夢破れ、徳川幕府は消滅した。明治二年（一八六九）十月には、長州藩は会津藩の窮状を察して金千両を送った。また、同三年には兵部大輔前原一誠が会津藩を寛大に対処したことを謝し、松平容保は「泰西王侯騎馬図屏風」（重文指定）を贈っている。

婚姻関係を見みると、容保の三男英雄は山田顕義の長女梅子と結婚して山田家を継ぎ、日露戦争時には乃木将軍の副官として活躍。また、容保実弟の桑名藩主松平定敬の孫娘は、長女誠子は旧萩藩主公爵毛利元道に、次女順子は大村益次郎家の子爵大村泰敏に、三女実年子は子爵杉孫七郎の孫杉七郎にそれぞれ

嫁いでおり、少なくとも戦前には長州・会津間の確執は存在しないように見える。

五　長州への逆恨み

昭和二十年（一九四五）以後、会津地方では、「長州藩により戊辰戦後に極寒不毛の地斗南へ追いやられた」、或は「長州藩は会津藩が賊軍だから遺体を長期間放置させた」と、長州悪人説を唱え始めた。会津藩の斗南移住の真実は、明治二年（一八六九）新政府は会津松平家名再興を内示して、陸奥国三郡（斗南）か旧領地の猪苗代のいずれか二者択一を提示したところ、会津藩は自ら斗南の地を選んだ。遺体放置の件は「明治戊辰戦役殉難之霊奉祀の由来」の文中に「彼我の戦死者に対する一切の処置を禁止」とあり、会津兵の戦死者のみ埋葬を禁じた内容ではない。会津戦後の新政府民政局には長州藩関係者は皆無で、長州悪人説は全くの濡れ衣であった。

六　長州悪人説を拡散させた小説家

長州悪人説を全国へ拡散させた人物は、直木賞作家の故早乙女貢である。早乙女は会津藩士の末裔で、会津藩への思慕の強い作家として雑誌『歴史読本』に『会津士魂』一三巻・『続会津士魂』八巻を連載し、多くの読者を得て吉川英治賞を受賞した。その小説中において、会津藩士は正義の被害者と仕立て、逆に長州藩士は悪の加害者、卑劣な悪の権化として徹底的に悪者として描写した。小説家は事実でないことを事実らしく描写し、読者は小説内容を真実と誤解する。『会津士魂』によって長州悪人説は真実として認識され、今では全国的な共通認識とされている。

おわりに

長州と会津の関係改善について、萩市から会津市に対して度々打診を行って和解の努力が続けられた結果、次第に融和に向かっているように見える。

一方、会津においても、歴史家の大川原史郎氏が二〇一七年発行の会津史学会編『歴史春秋』第85号において、「今に残る「長州への怨念」を検証する」と題して史料の見直しをし、その「おわりに」で、

「明治時代の会津史は、正しい史実と歪曲された歴史が混在し、正否の判断が付け難く、会津人の持つ歴史観は小説から伝えられる内容に大きく感化され、混乱している感は免れない。・・・誤解から生まれた怨念は・・・速やかに修正すべきである」

と記述し、史料に基づいて正しい会津史を発表している。大川原氏の発表は大変喜ばしいことで、長州と会津の関係改善に一歩でも前進することを期待したい。

戊辰戦争に於いて、多数の長州藩兵が犠牲となった。この小論が犠牲者たちの名誉回復の一助になれば幸いである。